



WINPEC Working Paper Series No. J1409  
February 2015

スペイン語学文学系学会・研究会の国際交流と国際発信

木下 登

現代政治経済研究所  
(Waseda INstitute of Political EConomy)

早稲田大学

講演題：「スペイン語学文学系学会・研究会の国際交流と国際発信」<sup>1</sup>

講演者：木下 登先生（南山大学教授）

コーディネーター：竹中宏子先生（早稲田大学人間科学部准教授）

日時：2014年12月12日（金）17:00～18:00 於早稲田大学3号館609室

発表概要：

本講演では、日本イスパニヤ学会（AJH）と日本・スペイン・ラテンアメリカ学会（CANELA）を中心として、スペイン語学文学系学会・研究会の主たる特徴とその国際交流について報告する。日本イスパニヤ学会は1955年に、「イスパニヤ語諸国の言語・文学など文化一般の研究を促進し、斯学の発展に寄与することを目的とする」として創立された。また、日本・スペイン・ラテンアメリカ学会は1988年に、「スペイン語圏の文学・思想・歴史及びスペイン語教授法に関するテーマについて研究し、論議することを目的」として設立された。前者は基本的な運用言語を日本語とスペイン語、後者はスペイン語とする。多くの点において特徴的な活動を展開する両学会に加えて、スペイン語学文学系の学会や研究会についても報告する。なお、発表は次の順による。

1. イスパニヤ語諸国またはスペイン語圏
2. スペイン語
3. 日本イスパニヤ学会（AJH）、国際交流と国際発信について
4. 日本・スペイン・ラテンアメリカ学会（CANELA）、国際交流と国際発信について
5. その他のスペイン語学文学系学会と研究会
6. まとめ

竹中：それでは、木下先生にお話しいただくこの会を始めたいと思います。まず僭越ながら、私から木下先生のご紹介をさせていただきます。木下先生は、現在、南山大学外国語学部の教授でいらっしゃいます。ご専門はスペイン哲学、あるいはスペイン思想史で、セネカから20世紀まで網羅される、日本では大変貴重な先生でいらっしゃると、私は認識しております。博士課程は、サラマンカ・カトリック大学で終わられて、12世紀の哲学者、翻訳者、その辺りのご研究を中心にされていまして。現在は20世紀の思想家オルテガや、特にスピリという哲学者を主に研究されています。ただ、そういった学術論文だけではなくて、例えば『ポルトガル語・スペイン語対照ガリシア語会話』とか、これは私が初めて木下先生のお名前を知ったんですけども、そういった大学書林から出ているものであると

---

<sup>1</sup>本稿は2014年12月12日に早稲田大学現代政治経済研究所「日本の対外発信」研究部会（部会主任：砂岡和子）において、同名タイトルで報告した内容をまとめたものである。なお報告の際には、コーディネーターの竹中宏子先生をはじめ、ロペス アルフレド先生、四宮瑞枝先生、渡辺暁の諸先生にコメントをいただいた。

か、あるいは比較文化に関する著作、『吹き抜ける風-スペインと日本、ちょっと比較文化論-』とか、あるいは『スペイン学を学ぶ人のために』、これはいろんなシリーズが出ていると思うんですが、世界思想社から出ているもの。それから『現代スペイン読本』、これは丸善から。それから『スペイン検定』、これは南雲堂フェニックスから。『新版 スペイン語の手紙』、これは白水社から。こういったところから、比較文化、言語教授法、応用言語学的な言語の教育あるいは普及、そういったものにも携わっていらっしゃる、大変幅広くご活躍されている先生でもあります。

さらに、学会の活動として、今日お話しいただく、例えば、日本イスパニヤ学会では現在副会長でいらっしゃるんですが、過去に会長を務められたり、当然理事もされていらっしゃる。それから日本・スペイン・ラテンアメリカ学会でも、会長を務められたこともあり。そういった学会活動でも、他にもいろいろな学会の会員でいらっしゃるんですが、理事、会長という形で中心的に日本におけるスペイン語学、文学、歴史、思想、こういったところの学会の重鎮でいらっしゃる方です。そういった先生のお話を聴けることを今日大変楽しみにして、私は個人的に参りました。では、先生にご発表いただきたいと思いません。よろしくお願ひ致します。

進行：木下先生、どうぞお座りください。

木下：ありがとうございます。基本的に座ってお話しさせていただきます。早稲田大学でのお話ということで、大変光栄に存じます。お招きありがとうございます。今日、お話を進めていくにあたって、日本イスパニヤ学会と日本・スペイン・ラテンアメリカ学会の、黒板に書きましたが、両学会の名称が似通っているところがありますので、前者は「イスパニヤ学会」、後者は一般に略称 CANELA で通っていますので「CANELA」、「canela」はスペイン語ではシナモンの意味なんですが、そう呼ばさせていただきます。

本日のテーマは「スペイン語学文学系学会・研究会の国際交流と国際発信」と題されています。イスパニヤ学会と CANELA という二つの学会について、これから、自らの体験を織り交ぜながらお話を進めさせていただきます。

ただいま竹中先生にご紹介いただきましたが、私が南山大学のイスパニヤ科を卒業した時には、日本の大学院でスペインの思想史あるいは哲学を専攻できることはありませんでした。それで、私の希望を聞いた恩師から、「(学を求めるなら)サラマンカに行きなさい」、というスペインの古いことわざ通りのお勧めがあって、サラマンカの国立大学に入学しました。しかし、当時、そこはまだ哲学科が設置されていなかったもので、教養課程を終えると、お隣のサラマンカ・カトリック大学に転学しました。カトリック大学で“Licenciatura”の課程を卒業するにあたっては、同時に国立大学卒業の資格を得るために、“Examen Mixto”という試験で専門課程3年間分の全科目の試験を受け直しました。また、博士課程を修了する時にも同様に二つの学位を得るための審査を受けました。スベ

インに渡ってから10年近く、ずいぶんと苦勞をしましたが、今では、優れた先生方から多大なお教をいただくことができ、幸せだった、素晴らしい体験だったと思っています。

私は、1999年に、CANELAの会長に選ばれました。また2002年4月に、イスパニヤ学会の理事長に選ばれ、同年10月には会長・代表理事となりました。両学会の会長の時期が半年ほど重なっておりました。おそらくこういう経験を持っている人は他にいないのではないかと思います。

ここに挙げた、イスパニヤ学会とCANELAという二つの学会の運営に携わった、こうした経験において、「これからは、学会はこんなふうにもっていかなくやいけないんじゃないか」と思いながらやってきたことが、多少ともどのような形で実現されてきたのか、またそのスピードがどうだったのか、そうしたことをお話しできればと思います。

さて、それでは、資料の目次の1から6に従ってお話をさせていただきます。

1. まず始めに、スペイン語の世界について。1955年に設立されたイスパニヤ学会では、主旨のところに、イスパニヤ語諸国の言語・文学など文化一般の研究を促進し、学問の発展に寄与することを目的とする、とあります。ここでは、「イスパニヤ語諸国」という言葉が使われております。一方、1988年に設立されたCANELAでは、「スペイン語圏」という言葉が使われ、スペイン語圏の文学・思想・歴史及びスペイン語教授法に関するテーマについて研究し、論議することを目的とする、とあります。

イスパニヤ学会創立の1955年からCANELA創立の1988年の間に、60年代から70年代にかけて、日本ではスペイン語の世界にも、大学院に修士課程がだんだんとできていきました。つまり、専門化がかなり進んだ時期です。一方、70年代、80年代にかけては、大きな「ラテンアメリカ文学ブーム」、それから「解放の神学」など、様々なラテンアメリカの力強い胎動が感じられた時期でもありました。この頃から、このイスパニヤ語という言葉が、だんだん、大学の学科名から消えていき、上智大学は今もイスパニア語学科ですけども、イスパニヤ語から一般的なスペイン語へと表現が変わっていき、現在に至っていると思います。

私達が対象としている今日のスペイン語学文学系学会における国際交流、国際発信に關しましては、なんと言っても、共通言語がスペイン語、ということになります。ここで作られた共通基盤から、スペイン語圏は、これは最近スペイン大使館の文化担当の方からのデータですが、国数としては21か国もあります。ラテンアメリカはブラジルを除いてほとんどです。一方、実はスペインは、アフリカではあまり関わりがなかったもので、今日、スペイン語圏であるのは、赤道ギニアという国が1か国だけです。あとは、すでにフィリピンも、ご存知のように、スペイン語圏ではなくなって久しいです。今日、スペイン語諸国またはスペイン語圏は21か国という大きな世界を構成しています。

2. 現在、約5億人に近い人々がスペイン語を母語として話をしてしています。スペイン語は、

ネイティブスピーカーの数としては中国語に次ぐ第 2 位、コミュニケーションの言語としても第 2 位。それからインターネットで使われる言語としても 3 位ぐらいというような、非常に高い順位です。また、日本においてスペイン語が第 2 外国語として学ばれている大学の数は 200 を超えております。ですから、世界の流れの中に日本もあって、わが国におけるスペイン語学習人口は、私が教員になった 80 年代頃から、ずっと増加を続けてきたのです。近年は、近隣の大国の言語にかなり第 2 外国語としての地位を奪われてきました。しかし、それがなぜかこの数年かなり戻ってきまして、スペイン語がかつての勢いを少し取り戻すのかな、という気がしております。

最近の予測データでは、アメリカでのスペイン語の話者の数はいずれ英語の話者の数を超えると言われております。私も自らの大学で国際担当副学長の仕事をする中で、毎年、20、30 の海外の大学と交流協定の協定を重ねておりましたが、実は向こうの大学の代表には、なんだかんだと言いながら、スペイン語が分かることがいく度もありました。例えば、リール・カトリック大学の国際担当の先生と、英語でやり取りを行った後、1 時間ぐらい経った頃でしょうか、「ところであなたは、スペイン語はできますか」、と尋ねられ、残念な思いをしました。最初からスペイン語でやり取りを行えば、お互いにもっと気楽なやり取りができたと思ったからです。このように、日頃、スペイン語の広がり、スペイン語の大きな力みたいなものを感じております。思い起こせば、若い時にある意味で偶然、スペイン語を勉強する機会に恵まれ、その一方で、哲学が好きになって、「哲学の勉強なら、サラマンカに行きなさい」、と言われて、その地で勉強を続けていったことが、実は今、グローバルな世界で、非常に役立っているというありがたい状況となっているのです。

さて、日本とスペインのつながりということでは、先ほど竹中先生にご紹介いただきました学会活動の他に、近年、仕事をさせていただいていることがあります。それは、「日本サラマンカ大学友の会」という、元スペイン大使の林屋永吉先生が名誉会長をされている会があります。今は田中克之会長へと受け継がれていますが、田中会長は、メキシコ大使、スペイン大使と歴任された方です。日本サラマンカ大学友の会は、単に友の会という言葉が意味するものよりももっと大きな役割を担っているような気がします。サラマンカ大学における日本語・日本文化教育は修士課程まであるんですが、それだけでなく、大学に付属した「日西文化センター (Centro Cultural Hispano-Japonés)」という立派な施設があります。その建物サンボアール宮殿はサラマンカ大学が所有する 16 世紀の由緒ある建物です。改装に当たっては 3 分の 1 の費用を日本側が、つまりは、林屋先生の呼びかけに賛同した日本の企業からの寄付金によって賄われました。その結果、ある意味、センターには、建物の 3 分の 1 に対して占有権みたいなものが保障されています。センター設立後は友の会も講師派遣等でその運営に参画しており、私もお手伝いをさせていただいております。

ここで、サラマンカ大学を軸にもう一つお話をさせていただきますと、ラテンアメリカにスペイン系の大学が、16 世紀当時からたくさん、ペルーのサン・マルコス大学をはじめ

として創られていったわけですけども、30 いくつもの大学のアルマ・マータと言いますか、それにサラマンカ大学が存在して、ヨーロッパとラテンアメリカ世界を繋ぐ蝶番のような形で存在している、という歴史的な現実があるのです。そういう意味で、友の会の仕事というのは、今後とも、ますます、日本とスペインだけでなく、ラテンアメリカとの深い関わりをも見据えたものとなっていくものと私は考えております。これは、ちょうど日本がこれからの世界で背負っていかなければならない役割の一つに相似するのではないかなと思いつつあります。

さて、実は、そのサラマンカ大学が 1218 年の創立ですので、もうすぐ 800 年、あと 4 年で創立 800 年になるのです。日本では、オックスフォード、ボローニャ、それからパリあたりが 1200 年代始めの頃にできたヨーロッパ最古の大学ということですが、そこにサラマンカを加えていただかないといけません。なぜ、サラマンカの名がこの中に加わっていないのか。この原因は非常に明らかだと思えます。明治以降、日本が求めたのは西洋の近代文明でした。19 世紀末のスペインは、表現としては申し訳ないけど、どん底状態です。デカダンスの極みという、フィリピンとかキューバとかプエルトリコも失ってしまって、アメリカに覇権を奪われた時ですね。そういう流れの中で、サラマンカ大学の存在がますます見えなくなったんでしょう。私達が、また私も積極的に、いろんな機会があるごとに、2018 年の意義とは何だろうか、日本にとっての意義とはとか、そして日本がそこに参画して何ができるのか、と検討を重ねております。私は、サラマンカ大学の 800 年というのはいろいろと学ぶべき大きな意味を持っていると考えます。こうした視点から、サラマンカ大学を筆頭にして、スペイン語圏の大学についても、わが国から、もう少し声を上げていきたいと思っています。

3. では、「日本イスパニヤ学会」の方に移らせていただきます。これはもう、日本のスペイン語の世界においては文句なしの屋台骨であります。1955 年から、ちょっとかさばるので表紙だけコピーしてきましたが、こういう、『Hispánica』という雑誌が延々と続いております。その中は、多い時には 15 点ぐらいの論文、少ない時でも 7~8 点。それがずっと積み重なってきて、私が会長・代表理事の時に、ちょうど学会創立の 50 周年だったので、記念として、創刊以来の全冊を CD 化しました。それが今、J-STAGE で上がっておりますので、容易に参照することができます。この学会は、我々のスペイン学の先輩方が、またその先輩の先輩方が始められた頃は、やはり 1898 年の世代の有名な作家達の作品を研究の一つの軸としました。特に東京外国語大学にスペイン語学科ができてわが国におけるスペイン語教育が広がった時の、主に語学文学をテーマにしたものなのですが、実は、発表タイトルや内容をよく見ますと、いやそれだけではなく、経済的なものとか、社会的なものとかも入っているのです。また、私にとっては、非常に懐かしい先生方がその中でもたくさん書いておられます。

イスパニヤ学会の今年の大会は、マドリード大学からイグナシオ・ボスケ教授をお招き

して、先生が編まれた特徴的な辞書についての話を聞く機会となりました。これは、一番最初のイスパニヤ学会の目標のところにある、優れた研究者を招く、として始まったものです。一番最初と言いますと、イスパニヤ学会は、1955年12月に東京外国語大学で初めての大会があった時に設立されました。そこでは、スペイン語諸国の言語、文学、文化等の研究の発展に寄与することを目的とする、という非常に大きな目標を幾つか箇条書きにしています。

ところで、会則には、内外の著名な研究者の講演と会員の研究発表からなる年次「大会」を開くことも書かれております。今年が大会として60回目となりました。今年について言いますと、2日間の日程で27の研究発表がありました。分野は、言語、文学、文化、言語教育であります。言語教育が具体的な形をとっていったのは、そんなに古い段階ではありません。元々この分野は、近年、すごく発展している世界だというふうに私は思っておりますが、違っているでしょうか。さて、各研究成果は、査読を経て、この『Hispanica』に掲載するということになっています。この他に、年次に複数発行される「会報」ですが、会計報告の場としての会報ではなくて、書評とか、かなり中味の重たい会報を発行しております。こうした会報を出し始めて14年目だと思います。もう一つ、会則に謳っているものに、内外の関係諸団体および研究者との学術交流があります。ここが今回の報告のテーマでもあります。イスパニヤ学会が主に年次大会のところで、アカデミア等の著名な学者を招いてお話を聴くというのは、定期的に、毎年ということではありません。国内にも優れた学者、先生がいらっしゃるの、そうした方々が講演されてもいいわけです。ただ、国際交流という話になると、国内からだけではなく、やっぱりスペインやラテンアメリカ諸国から、学術学会でなければ招聘できないような碩学に来ていただいとということになると思います。こうした中で気づくことは、日本から、招かれて向こうに行く人の数がやはり極めて少ないことですね。ここが一番の問題点で、学術的な輸入超過は明らかです。

続いて会員数についてですが、これは国内外を含めて約400名という数字で間違っていない、と思います。この中にはもちろん、ネイティブの方、また日本人教員も入っています。ただ、それほど院生数は多くないと思います。イスパニヤ学会は、主体は教員というか、第一線の研究者達が軸になっていると私は思っています。

4. ではもう一方で、「CANELA」はどうでしょうか。実は、CANELAの方は、まだ学術会議の登録団体ではありません。こうした現状を変えようと、創立時からずっといろいろとやってきましたが、なかなか達成できません。何故ならば、会員の中に専任教員が100人ぐらいいないとだめとか、いろいろな条件があるからです。今、CANELAの方のお話をしますが、CANELAの良いところと限界みたいなところがあります。ですから、CANELAは、とにかくイスパニヤ学会を先頭に、前に進んで行こうとしてきました。そして、学術団体登録の他にも、やるべきことはまだまだたくさんあるとあってきました。

少し話は戻りますが、もう一つ、イスパニヤ学会についてお話をしたいと思います。地

域研究学会連絡協議会が2003年、2004年ぐらいにできあがっていったんですけども、私達のイスパニヤ学会も、ぜひここに入って地域研究という分野でも参画をしたいと思っていました。それは少なくとも2003年の時はそういう動きの中で、形になったんですけども、実は、今年の総会において退会を決定しました。要するに、実際的には、イスパニヤ学会にとってはあまり活動の場が無かったということになります。それは何故かと考えますと、イスパニヤ学会自体が、そういった地域研究の方向の性格を主たる研究領域としては持ち合わせていなかったということに起因しているのではと、これは私の個人的見方ではありますが。このことを、「日本ラテンアメリカ学会」を通して考えてみたいと思います。日本ラテンアメリカ学会は1980年創立の学会です。その活動目的に従って見てみますと、ラテンアメリカ当該地域の自然、人文、社会、これを対象にして研究をするという学会です。ラテンアメリカ世界のことを研究されている方もイスパニヤ学会にももちろん参画されているんですが、でもどちらかと言うといわゆる地域研究の色の濃い方々がラテンアメリカ学会の方に所属されているのではないのでしょうか。ですから、私たちイスパニヤ学会が2003年頃にいろいろ協議して、なんとか前に進めていかなきゃいけないと思っていた地域研究のことは、実際は、学会の体質とは中味がちょっと違っていたということになったのではないのでしょうか。

イスパニヤ学会は大きな発展を遂げて、日本のスペイン語学と文学系学会ならびに研究会の太い幹になってきましたが、なればなるほど体質的に、例えば、近年は言語教育部門も設けたり、研究の守備範囲がある意味で決まってきたのかなと感じております。とすると、では何が望めるのか。私が思いますに、イスパニヤ学会持ち前の分野で、例えば、スペインとかラテンアメリカの国々の研究者とのさらなる交流と交換が、もっと現実的かつスピーディに具体化されていくべきだ、というのが私の見方です。もちろんCANELAを始め多くの学会・研究会においても同様のことが言えると思います。

さて、CANELAに話を戻します。CANELAは1988年に立ち上がっていったのですが、そこでは、スペイン語圏に関わる専門的研究を深めるとともに、日本におけるスペイン語教授法の向上を図り、会員の相互交流と学術情報交換の場を提供する、とも定めています。実はこれは、アルゼンチンのご出身で、スペイン語教育とラテンアメリカ文学教授において多大な貢献をされたペドロ・シモン教授を軸に、周辺7人位と準備して出来あがっていったものです。イスパニヤ学会に加えて、どうしてこれが必要だったのか。イスパニヤ学会があればよかったじゃないか、という話ですが、実は、イスパニヤ学会での発表は、今は日本語、スペイン語、どちらでも全く問題のない状態で、発表者は自分の得意な言語で、ネイティブの方は自分の言語で、ということですが、この80年代ごろまでは、日本におられる、例えば、スペイン語を教えておられるネイティブの先生達は、なんとなくイスパニヤ学会では日本語でやらなきゃいけないという心理的な制約を感じていたとか。ネイティブの研究者の方々がもっと自由に研究発表できる場として、CANELAの創立の一番大きなポイントは、全てをスペイン語で行うことにありました。現在、会員数、およそ140名のうち、



約6割がネイティブになっています。近年は、4割を切りかけた日本人会員は言語的におおいに頑張る必要があります。スペイン語で、総会から、何から何まで全てを行うわけですので、日本人発表者には大会の前の晩から大きなプレッシャーがかかります。しかし、創立から26年が経ってみますと、日本人発表者のスペイン語に大きな発展がみられます。CANELAの成した貢献の一つかもしれません。

また、イスパニヤ学会とCANELAでは、研究の方向性も少し違います。例えば、CANELAでは最初からスペイン語教授法という分野が入っています。1988年頃では、多分に画期的な話だったと思います。今では、その中に言語学分野も独立をしたり、教授法のところは、設立当初からワークショップがかなり頻繁に行われてきています。その結果として、例えば、スペインとか他の国で、インターネットによる学位の取得を、ネイティブの先生方、またはその先生方を見ていて、日本人の教え子さん達が、学位を得ようと努力されています。CANELAは当初から原動力として、情報、海外への発信の可能性を秘めていたわけです。

また、研究成果についてですが、『CUADERNOS CANELA』という機関紙でまとめられています。CANELAの一番大きなところは、動き始めてこと数年でインターネットを利用して会の活動が可視化し、情報の発信という面では、おそらくスペイン語系の学会として最新の動きをしてきたのではとないかと思います。会の創立当初からインターネットに非常に精通した会員がいて、今またその方が会長として牽引役になっておられるので、ますますこうした傾向は続くものと思われまます。ところで、機関紙への論文の掲載についてですが、まず学会で発表して、そして投稿、査読を経て掲載される、というパターンがありましたが、このシステムでは、日本在住の人以外には発表しにくいことになり、また、そのために日本に帰ってくるというのも大変な話です。CANELAでは、世界に広げた、査読陣営の充実により、外国からの直接の投稿を認め、旧来の投稿規定が取り払われたという点も、今後の発展が期待できるのではないかと考えております。つまり、学会自体は日本にありながらも、世界中から参加が可能な組織へと変わりつつあるのです。これこそスペイン語がもつ広がり証といえるのではないのでしょうか。

5. ここまで日本イスパニヤ学会とCANELAについてお話ししてまいりましたが、スペイン語系のその他の学会や研究会についても言及しておきたいと思ひます。まず始めに、関東を中心に、東京スペイン語学研究会。研究会誌『スペイン語学研究』を出しています。同様に、関西では、関西スペイン語学研究会。『Lingüística Hispánica』を出しています。また、関西スペイン語教授法ワークショップ (TADESKA)、スペイン語教育研究会 (GIDE) も専門的な研究活動を展開しています。アジアのスペイン語と文化の研究者の学会としては Asociación Asiática de Hispanistas が1985年から活動を続けています。最後に、学会とは異なりますが、「セルバンテス文化センター東京」を挙げておきたいと思ひます。世界40カ国70都市に教室を開いているスペイン国営のスペイン語教育機関です。その中でも一番大きいものは、セルバンテス文化センター東京だそうです。7階建てビル1棟、最上

階にはスペイン・レストランを備え、スペイン語とスペイン語圏文化の普及に、実に多彩な活動を展開しておられます。アントニオ・ヒル館長を筆頭として、センターは日々の活動に多大な情熱を注いでおられます。セルバンテス文化センターに繋がってれば、自分達の活動は、イスパニヤ学会や CANELA の活動は、自動的に何か世界に紹介されているのです。そしてここには、スペインのみならずスペイン語圏の国々も積極的に参画しているのです。

さて、主として 2 つの学会の活動をめぐっての発表になりました。イスパニヤ学会と CANELA、この 2 つを比較というよりも、イスパニヤ学会という太い幹があって、そして CANELA があり、その他の学会や研究会も、それぞれ重要で特徴的な活動を展開しているということです。まだこの他にも重要なグループ等がありますが、時間的な制約もあって、言及は絞らせていただきました。

6. 6 番目のテーマ、まとめです。まとめと言いますと、わが国におけるスペイン語の世界は研究の専門化が進んできたこと。70 年代後半の日本における、修士課程、そしてその後の博士課程の設置と充実。スペインにはスペイン政府給費留学生として、メキシコには CONACYT による留学生として、また多くのスペイン語圏の国々の援助で、たくさんの日本人研究者が受け入れられてきました。こうした努力により、日本とスペイン語圏諸国との間には、学術のみならず人的な交流の基盤が充実してきた、と言えるのではないのでしょうか。今日、グローバルな時代の到来にあって、スペイン語を共通した表現言語として、イスパニヤ学会や CANELA のみならず多くの学会や研究会が、実は、スペイン語諸国の、またはスペイン語圏の学会ということです。

わが国の大学においては、スペイン語が専攻の学科で、またたくさんの大学でも教えられています。早稲田大学でもかなりの数の学生さんが勉強しておられると思うんです。これはもう大きな底力の形成であり、世界的にスペイン語のネイティブがますます増えていく状況に合致しています。スペイン語は、どちらかと言えば、言語や文学や文化を研究するために重要な言語と見なされてきましたが、今日では、人文学の分野のみならず理工系の分野をも含めた、「学術の言葉」になろうとしています。こうした点もちゃんと見据えて、今後は、スペイン語をますます活用して、日本の方からも世界へと学術交流活動を広げていく必要があります。スペイン語学や文学系の学会においても研究者が育ち、これまでの学術的輸入超過から、本当に輸出できる段階に近づいてきたと思います。その言葉に乗せて、さらには国際協力とか平和活動にも進んでいくべきではないだろうかというのが、今の私のテーマです。以上です。

竹中：はい、どうもありがとうございました。